【5】 考察と今後の課題

一昨年度、昨年度は生活単元学習を、本年度は生活単元学習に加え、「音楽科」「体育科」「書く」ことを研究の中心として実践に取り組んできた。この実践を通して、少しずつではあるが、変容が見られるようになった。次に、その変容と思われるものを述べる。

- R男は水泳が好きではなかったが、 3年生の夏、呼吸法を習得し、プールの横を泳ぎ切ることができるようになってから、水泳は大好きなスポーツの一つとなった。
- G男は人前での発表が苦手で、学習発表会（本年度から文化祭となる）の劇のせりふを言うのがやっとであったが、少しずつ自分を表現することに抵抗がなくなった。 3年になってからは劇のグループのリーダーとなり、衣装作りやせりふ作りに意欲的で、動きを自分なりに工夫して考え、堂々と役を演じた。
- Y男は身体の成長もめざましかったが、精神面でも大きな成長ぶりであった。少しずつ自己主張ができだし、楽しみにしている行事のときは特に意欲的で自信が持てるようになった。真剣な表情や顔をしっかり上げている姿勢でそれが感じられる。
- W男はひらがなを習得したが、表記の段階で進歩があまり見られなかった。しかし、ワープロを使用することでひらがな文字を探すことが早くなった。
- N男は友だちを意識するようになり、友だちの名前を覚えて呼んでみたり、友だちに進んで関わろうとしたりする姿が見られるようになった。昨年度と本年度の大山登山の絵を比べると、本年度は友だちをたくさん描いている。
- K男は学習の場や緊張場面では声を出すことがほとんどなかったが、文化祭の劇の中で友だちといっしょに声を出してせりふが言えた。そして、得意な側転を動きの中に取り入れたことで、楽しんで役作りをしていた。
- 休憩時間になると、友だちを誘って自転車乗りや卓球、バスケットボールを楽しむ生徒が増えた。自分たちでルールを決めて、遊ぶこともある。

このように、生徒の変容の姿を挙げた上で、中学部の 3年間の実践を振り返り、成果や問題点、課題を次に取り上げてみた。

(1) 生徒理解に努める

生活単元学習の題材を精選したことは、より生徒の実態に添うことができ、生徒の主体性を引き出すことができた。しかし、生徒は日に日に成長しているので、日々の様子を観察し、実態を十分把握しておくことが大切である。また、毎年、学部を構成する生徒の集団も変化していることを考え、題材を精選していかなければならない。生徒の多くはゆったりと時間をかけて成長することが多く、中学部 3年間をじっくりと見つめて評価する必要があり、そのような変容や成果の表れを見つけるためには、生徒個々の成長や発達に応じた指導方法を考えておかなければならない。中学部 3年間を見通したねらいを持ってこそ、生徒一人ひとりの変容ぶりをつかむことができる。

(2) 中学部にふさわしい題材の選定と支援の工夫をする

中学部の生徒にとって、どんな題材がよいのか、どう支援したらよいのかを検討し、授業づくりの中に取り入れた結果、次のようなことが言える。

- 苦しいけれどもがんばり、その結果、やった、できたという達成感を感じられる題材は、自分づくりの段階で「自己客観視の芽生え」以上の生徒には効果的であった。
- 友だちといっしょに活動する、友だちとの関わりがあるということは中学部の生徒にとって、大変大きな力となった。教師に対しては難しいことでも、友だちや中学部という集団に対してであれば、すんなりと受け入れられることが多々あった。思春期の中にいる中学部の生徒にとって、友だちはかけがえのないものである。集団の中身にもよるが、どの発達段階の生徒においても、その効果が見られた。この集団の効用ということから、「音楽科」「体育科」の学部全員による合同の学習形態は、生徒の自分づくりの発達にとって適当であると言える。生徒の中には、他学年との学習を楽しみにしているものもいる。
- 個に応じた支援の仕方は、教師の具体的な言葉かけや行動を共通理解するようにした。その生徒の個性や実態に合った教材、教具の提示はより効果的であった。具体物を見せる、方法や順序を掲示するなど視覚に訴えることは、生徒自身が自分の活動に見通しが持て、主体的に学習に取り組めることができる。
- 生徒のこうしたいという意思が生かされ、それを行動に表すことのできる場、自分の力が発揮できる場、このような場を設定することで生徒がより意欲的に、より主体的に活動することができた。

しかし、一方で次のような課題もある。

3年次に研究教科を広げたが、「音楽科」「体育科」という教科の特性を考えた上での支援の工夫の共通理解、生徒個々の持っている力や実態の把握が十分でなかった。やはり、教師間の話し合いは欠かせないものであり、話し合った分、共通理解が深まるものである。

自分でなんとかやってのけよう、難しいけどチャレンジしてみようという気持ちや、あの人のようになりたい、あの人に近づきたいという気持ちを大事にし、少々下手でも生徒の手に委ねる、お膳立てしない、失敗しても成功につながるように、教師は一歩控えて支援するという仕方が、プライドもあり、自分でやってみたい、自分にもできると思っている中学部の生徒にはふさわしかった。これは、生徒が思考の過程の中で揺れ、とまどいながらも確かに自分自身を見つめることができつつあるからではないだろうか。

将来、生徒が自分自身の生活を楽しむためには、われわれ教師、そして保護者、地域社会の人たちが、彼らを一人の大人として認め、少し援助しながら、しっかりと多くの目で見守り、生徒自身が自分で自己決定し、主体的に生活できるような力をつけていくことが必要である。ただ、目先の楽しさや楽な方に流されるのではなく、自分なりの目標を持ち、それに向かって進む力を授業の中で、学校生活の中でつけることがわれわれの望むところである。そして、今後、生徒がどのような姿を見せてくれるのか、楽しみでもある。

（高木雅子）